

# 「義経芝居巡」(仮題)をめぐって

小谷成子

はじめに

源義経には、お伽草子「御曹子島渡り」をはじめとして異国を巡る物語がいくつもある。ここにとりあげた仮題「義経芝居巡」(架蔵)もこれに似せたものである。

主人公義経は、この世の異国・異界ともいうべき芝居の世界を巡る。国家安寧のために義経は悪にたちむかう。天下を狙う悪の張本人は蘇我の入鹿。入鹿に心をあわせるのは高師直と明智光秀。悪人達を退治してめでたく物語を終えるが、その過程では、いくつもの芝居の世界が重なりつつ展開する。次に粗筋を述べておく。

大内にあらわれた鹿を射止めた義経は、官女小町を賜わるが、小町に心を寄せていた師直に憎まれ、逆槽の遺恨もあって悪口さ

れる。たまりかねた義経は師直に斬りつける。このふるまいに怒った頼朝は、堀川御所に討手をかける。義経は吉野の大判事の許に逃れ、久我之助を偽首にして、その身は大物浦へ落ちる。

大物に宿を乞う旅人を義経と見抜いた主人の銀平(実は平知盛)は、泊めてその首を狙う。それと察した宿の娘おふねは、義経を逃がし、自分が身代りにたつ。娘の首を斬ったと知った銀平は、出家して文覚となる。銀平の下人六蔵が明智に使いを出し、義経主従を舟で追う(大物浦と矢口渡を重ねる)。悪源太原義家の魂魄があらわれ、明智を二つに引裂く。

文治安方は客僧を伴なって山から帰り、鉢の木を焚いてもてなす。身の上を問われた安方は、渡辺綱とあかす。羅生門にて茨木童子に甲の鍬を引き切られ、取り戻すことが出来なかったため、浪々の身となった由を語る。客僧は、笈から鍬を出し、その時鬼と見たのは景清だと自ら名乗り、今宵の礼にと鍬を渡す。頼朝

の首をとるため鎌倉に入るといふ景清に、安方は粟飯をすすめる。

義経から預った「たまきの宮」が、物言わぬ病のため、安方は薬となる爪黒牝鹿の生血を求めて禁断の鹿を射止める。父安方の身を安じた息子三作は、自らを代官所へ訴え出る。かけつけた捕り手に、景清は犯人の証拠として金札を見せ、罪人として鎌倉へ送られる。鎌倉入りした景清であったが、頼朝の仁心に感じ、賜わった衣服を切ることで無念をはらし、眼をくって日向へ赴く。

師直と明智を失って狂い戦う入鹿の隙をみて、義経は鎌で入鹿の首を落とす。この鎌を倉に納めたことから、鎌倉という地名になり、頼朝・義経の仲も良く、めでたし〜。

#### 書誌のことなど

外題・内題・奥書及び柱記を欠くので、本文一ウに「書つゞりたる新狂言義経芝居廻」云々、本文二オに大字で「義経芝居廻」とあることから、「義経芝居廻」(仮題)としておく。

藍色替表紙。五丁。縦二一・二×横一五・二(センチ)

刊年・版元も不明。しかし、本文一ウ・二オに

これがてんわうじ屋か一作か 取所もないきついで慶子からぬ狂言じや

とある。「天王寺屋」「慶子」こと中村富十郎(俳名慶子)であり、最も有名な初世(享保四年(一七一九)から天明六年(一七八六))と考える。よって富十郎の活躍した時代のものとなろう。

「義経芝居廻」の記述から、義経が巡った芝居の世界の登場人物名を手掛りに、その内容にそった浄瑠璃を考えてみたい。これは、表現との重なりや初演年代が確認しやすいことによる。現在判明したものは以下の通りである。

①「松王丸」(三オ) ↓「菅原伝授手習鑑」延享三年(一七四六)八月二十一日竹本座初演。(「手習鑑」と略す)

②「銀平本名八新中なこんとももり」(三ウ) ↓「義経千本桜」延享四年(一七四七)十一月十六日竹本座初演。(「千本桜」と略す)

③「高のもろなを」(一ウ・二オ・二ウ・五ウ)、「かろうゆらの助」(二ウ) ↓「仮名手本忠臣蔵」寛延元年(一七四八)八月十四日竹本座初演。(「忠臣蔵」と略す)

④「文治安かた」(四ウ・五オ)、「玉きの宮」(五オ) ↓「奥州安達原」宝暦十二年(一七六二)九月十日竹本座初演。(「安達原」と略す)

⑤「娘おふね」(三ウ)、「しもべ六蔵」(四オ) ↓「神靈矢口渡」明和七年(一七七〇)一月十六日外記座初演。(「矢口渡」と略す)

す)

⑥「大はんじきよすみ」(二ウ)、「こがの介」(二ウ)、「三作」(五オ) ↓「妹背山婦女庭訓」明和八年(一七七二)一月二十八日竹本座初演。「妹背山」と略す)

以上から、この本の刊年は明和八年十月竹本座初演の「妹背山婦女庭訓」以後のもの。かつ、富十郎の死(天明六年)からさほど遠くない頃の成立であろう。

なお「あけちみつひで」(四オ)が登場するので、「絵本太功記」(寛政十一年(一七九九)七月豊竹座初演)とのかかわりも考えられ似た趣向はあるが、他の演目にも見られるので考察には加えなかつた。

翻刻にあたっては、通行の文字にし、適宜空白の区切りをもうけた。判読不明の箇所は□とした。後に、図版を掲げておく。

### 翻刻

(一ウ・二オ)

先以て御町中様御さけんよろしく被遊御座候段目出度奉存候 左候  
得はれい年の通り御当地ハ暑氣の間ハ芝居相休 又ミ中元の御礼御

目見へ狂言御目ニかけ申度候へ共 不調法成もの共打寄候得は御目  
ニとまり候事も無御座候 然ル所右申上候通り暑氣之御ミじゆく成  
私朝夕書つゝりたる新狂言 義経芝居廻と申取所もない狂言御座候  
ゆへ 御子様方之御ときにも致度 不調法もかへり見ず御わらひぐ  
さのたねと成 これがてんわうし屋か一作か取所もないきつい慶子  
からぬ狂言じやと いつく迄も御わらひ顔をはいし申度奉存候  
先ハ本出候ハ、 いづれもさま方御もとめ御覽可被下候

よりつねしはみめぐり  
義経芝居巡

にんりやう 人皇三十七代ごだいこの天王の御宇 いさか 入鹿大じんかうのものなをと  
心をあはせ 天下をわがものにして ミかどてうあひのミなの川の  
女御を手に入んとたくミける ころハ寿永秋の比 大内に大キなる  
しか 鹿出て南殿の上に

高のもろなを

いるか大じん

よしつね 身にあまりありがたふぞんじ奉ります

はなのいろハうつりにけり いたづらな人じや

よしつね ものなをかあくこうをき、かね切つくる

ものなを てをおひにげのびる

やれきつたく きつたわいな

(二ウ・三オ)

いつまでくとなきければ ミかとおどろき時の武将いよのかミ源  
のよしつねにめいじていとめよとおふせける よしつねうけ給はり  
よつひいてはなつ矢さきハあやまたず まつたゞ中をいとをされま  
ろびおつる所を 仁田の四郎あたりと鹿に打またかりおづ、をつか  
んでしりのけんけつを九刀さし通す ミかどゑいかなのあまりくハ  
ん女小野の小町をよしつねのやどのつまに下さる、 もろなをかね  
てより小町に心をかけていたりしが よしつねにたまハリしをミテ  
むねんがる

小の、小町吉田へさんけいの道にてものをなくとかれなんぎす  
る これ小町さんおまへの事ならふかくきの九十九よおろか百年  
でもだんないく

ものを小町をくどけ共かてんせず 其上さかろのあらそひ二まけ  
大キニむねんニ思ひ よしつねをつミニおとさんとごてんにてさ  
まくくあくこうする いつてつたんりよの義つね公 もろなをかあ  
くこうをこらへかね御はかせをもつてもろなををした、かに切給ふ  
これにおどろき御所の五郎丸かけ付よしつねをたき留る

かゝる様子よりも公きこしめされ大キいかり給ひ よしつねをう  
つべしとよかハのかくはんをほり川の御所へつかハし給ふ

それより義つねほり川を立のきよしのへおち行 大はんじ清ずミの  
やかたニしのびる給ふ 又も此よし聞へけれバくびうちきたるべし  
石どう右馬之丞ニ仰付らる、といへ共 石どうハ義経のめんていし  
らざれハ くび見るやくにと松王丸を付らる、といへ共 松王先年  
あをむぎをかりしとがをよしつねニたすけられしおんかへしに こ  
がの介のくびをよしつねのくびなりとてもちかへる

これより義経よしのを立のき大もつのうらへといそぎしが 日もく  
れけハ一ツ家ニやどをかり給ふ

大はんじきよすミ

こがの介 よしつねニなりかわりはらをきる

かろうゆらの助 にせといハゞゆるさしと心をくはる

よしつね公もミとれ給ふ

行かれたるたびのもの 一夜のやとをかして下され

テモいとらしいよいとのご おやといたしませう おはい

りあそばせ さあくくく



(三ウ・四オ)

このやのむすめよしつね公を見そめる あるじハ銀平本名ハ新中な  
こんとももりにて 何とぞ平家のあだ源のよしつねを一たちうらミ  
んと 此所にしのびふなをさとなりある 娘おふねよしつね公のよ  
うしよく二なつミ思ひのたけをくとく よしつね公もやどをかる手  
が、りと娘にはだをふれ給ふ 銀平ハ義つねといふことをさとり大  
ニよろこびたゞ一うちにせんものとしつねのしん所へしのひ入ル  
おふねハおやのそふりこゝろへずと義つねをおとし参らせ 其身ハ  
よしつねのゑぼしかりぎぬをまくらもとなをしおきふしいたる  
銀平なんなく忍び入くびかきをとし見れば こハいかによしつねな  
らで娘おふねがくひなるゆへ げうてんしくやミなげ、とかひなし  
と一ねんほつきしてもとゝりおし切 名ももんかくと改高野山へ引  
こもる

しもべ六藏かちうしんにて あけちミつひで大せい引ぐし義つねを  
打とらんと 矢口のわたしにさしか、り早ふねにておつかくる 時  
ニふしきや 一天にハかにかきくもりらいてんはた、カミしてうん  
中ニあく源太のほうこんかミなりとなり あけちをひつつかミニツ  
に引きく

こゝろさしハうれしけれと われハねかいのあるミなれハゆ

るして下され

おまへのやうないとしらしいのご いつ迄もくこゝにこ

さつて下さりませ ヲ、はつかし

たんなハすばやい人かな

とも盛かもんがくになるとハどうしたことじゃ さりとハとも

むりじや

そのときよしつねすこしもさハかず 打ものぬくニハおよば

ぬく

へんけい とももりかとおもひしゆすをおしもむ

あけち二なつてぞ しゝてんげり

くハばらく

ミづあミだぶつく

(四ウ・五オ)

いろくたのめどもとくしんせずせひなくかへらんとする道にて  
文治安かた山よりかへりがけ此ていを見て さいわい仏のめい日な  
ればわしが所へきて一夜をあかし給へともなひかへりもてなしけ  
るがよさむまさりけれハ たきびをして参らせんとおもへどもしば  
たきぎもなくいかハせんとおもひしが はちうへの木を取いだし

これなとたいてあてまいらせんと梅の木をたいてあたらする

擬文治の身の上をたつねられ 何をつ、まん本名ハわたなべの源五  
つな すぎしころ らせうもんにていばらきどうじニ引きられしか  
ぶとのしころとりかへさんにも手たてなく 此所二ろうくゝの身と  
なりはてしとかたりける

かげきよおいの中のうちよりしころをいだし 其時のおに、見へし  
ハ此悪七兵衛かげきよ也 こよいのへんれいニきでんへいんしん申  
われハこれよりかまくらへ入込 よりともものくびとらんと立出んと  
すれバ 文治安方しバしととゞめ ヲ、いさぎよし さりながらは  
らさむふてハゆかれまじ さいわいありあふあハのめし これなと  
くふていかれよといふに かげきよくハぶんくゝ あきひだるふて  
もこたへられぬニふゆひだるいハなをさらと ちそうのあわのめし  
びつを引か、へてぞくらひける

文治ハよしつね公よりあづかりし玉きの宮 ものいひたまハず 此  
やまひをなをすニハ つまくろのめじかのいきちをもつててうがう  
しのますれバ平ゆするとの事ゆへ 人しれず鹿をうちけるゆへ 村  
中せんぎきびしくありければ 三作ハち、のミのうへをおもひ  
れとわがでに代官所へうつたへに行

へさてくよふくふものゝふかな

へとりての大せい安方が家をとしまく

か、さんないて下さるゝな

へとりてのもの三作を引立かへらんとする うしろより其とが  
人ハわれなりと立いづる

へしてしかころしのせうこでもあるか

へしやうこといふハこれなりとこがねのふだをさしだし見する  
これぞとがにんと成かまくらへ行よりともニあハんとのかげき  
よのけいりやくなり

(五ウ・六オ)

かげきよハ平家□あたよりともをうらミんと まなこにうをのうろ  
こを入かんちとミせとがにんと成来りしか よりとももの仁心をかん  
じまなこをくりいわ井こうとうとなのり ひうがのくにへ引込ける  
扱入鹿大臣 高のもろなをあげちミつひで兩人ともうれし(マヤ)ハ大  
にいかり われおしよせてへろくぶしともひねりころしてくれん  
ずと あれにあらてかけ来り 一間のうちへかけ入んとする所に  
きミをしゆごするめんくゝハ かまくらのごん五郎かげ政けんけい  
きんときしのづかはじめ御座をまもつてひかへいる 入鹿ハこれを  
こと、もせず よしつねめがけとびかゝる所を きんときいがの  
ミ 右とひだりニくミついたり 入鹿ハ猶も大将のごぎをさして行

んとする やらし行じといどミあふ其ひまニ よしつね公入鹿がう

しろへかけまハリ かまをもつて入鹿がくびをかき切給ふ くびハ

そらへとび上りくハゑんをふきかけ よしつねのかぶとへくひつか

んとする所を すかさず刃にさしつらぬき給ひける

悪人たいぢそれよりも御れんし御中むつましく おさまりなびく時

つかせてたかりける次第也

高のもろなを たくミあらハれうたる、

かげきよ よりとも公のみふくを切さき むねんはらす

入鹿かくひ とびあがりくハゑんをふきかけ よしつねのかふ

とにくひつく

しめたぞく くびがなふてもりきむかく

入鹿をたいぢ給ひしかまを くらにおさめ給ふより かまく

らといふぞかし

### 考察

先にあげた浄瑠璃を手引として、義経と共に芝居の世界を旅してみよう。

(一ウ・二オ)

・人皇三十七代ごだいこの天王の御宇入鹿大じんかうのものをと  
……

歴史上からは、人皇三十七代は斉明天皇であり、後醍醐天皇は九十六代である。「忠臣蔵」「矢口渡」の浄瑠璃とこの背景にある「太平記」から、後醍醐天皇の名を用いた。人皇三十七代と設定したのは、蘇我入鹿の登場する浄瑠璃「妹背山」をふまえてのこと。入鹿退治は、三十六代孝徳天皇の時代であったが。

・ミなの川の女御

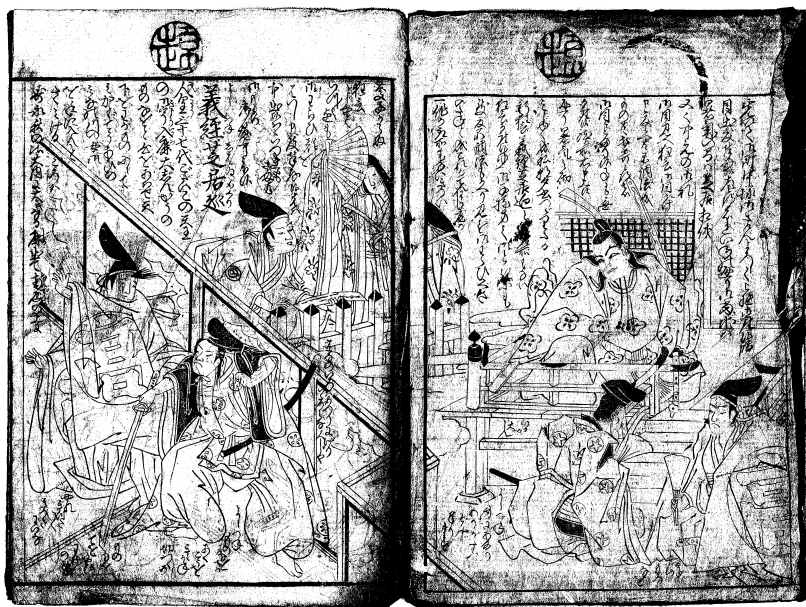
未考

・寿永秋の比……

主人公が義経であり、源平合戦も描くことからの元号設定である。義経には、「忠臣蔵」の塩谷判官を重ねる。

・一ウの御殿には入鹿。段の下の義経が「身にあまりありがたふぞんじ奉ります」と言っているのは、「忠臣蔵」一段目に「このたびの御役目。守備ようつとめさせてくれよと。塩谷が内証、顔世の頼み」とあり、師直が式作法の師範であることをふまえる。師直の袖には、「忠」がしつかと描かれている。

・二オで官女小町に渡すのは、師直からの恋歌の短冊か。「忠臣蔵」



の師直が、塩谷の奥方顔世に恋文を送って口説くが、たしなめられたことを暗示する。「はなのいろハ……」は、次に登場する官女小町を見据えて小町の歌「花の色は移りにけりないたづらに我がみよにふるながめせしまに」の一節を用いた。「いたづらな」には、和歌の一節と艶書を送った師直とにかけた。

・よしつねものをかあくこうを……

「忠臣蔵」三段目松の廊下に見立て。義経には、高師直に斬りかけた塩谷を重ねる。「忠臣蔵」には次のようにある。

きさまもちやうど鮎と同じことハ、くくく、と出放題。判官、腹に据えかね……また本性なりやどうする。オ、かうする、と抜き討ちに。真つ向へ切りつくる

挿絵が本文を先どりする。次への興味をもたせる手法で、以下にも使われる。

(二ウ・三オ)

- ・二オ、三ウにかけての大内南殿になく鹿を射て小町を賜わる義経に、同じく南殿に鶴を射て菖蒲の前を賜わる源三位頼政を重ねる〔平家物語〕巻四「鶴」、〔太平記〕巻二十一「塩谷判官讒死事」。
- ・いよのかミ源のよしつね

義経が伊予守であったことによる。

・仁田の四郎あたりと鹿に打またかり……

演劇によく登場する趣向であるが、もとは「曾我物語」巻八の「富士野の狩場への事」による。鹿に乗りうつり、尾筒を手綱にとって刀を突き立てる。「九刀さし通す」のは、前述「平家物語」

の「鶴」に、猪の早太が「九かたなぞさいたりける」と同じ。

・小の、小町吉田へさんけいの道にて ものなを二くとかれ……

吉田参詣の道で師直が小町を口説くことは、「忠臣蔵」一段目の鎌倉鶴岡八幡社で師直が顔世を口説くこと、「安達原」一段目の吉田社で大江維時が八幡太郎義家の奥方敷妙に艶書を送り口説くことに同じである。

・さかのあらそひ二まけ……

逆櫓の争いに負けて悪口する師直には、逆櫓の遺恨で義経を讒言する梶原景時をふまえる。逆櫓のことは「ひらかな盛衰記」(元文五年(一七四〇)四月十一日竹本座)三段目にもある。もとは「平家物語」巻第十一「逆櫓」、巻第十二「土佐坊被斬」にある。

・いつてつたりよの義つね公……

「忠臣蔵」四段目の顔世のことばに次のようにある。

恋のかなはぬ意趣晴しに、判官様に悪口。もとより短気なお生れつき。え堪忍なされぬはお道理でないかいの……

義経に塩谷を重ねる。

この義経を抱きとめる御所の五郎丸は、富士の牧狩で曾我五郎を抱きとめた御所の五郎丸であり(「曾我物語」巻九の「五郎めし」とらる、事)、塩谷を抱きとめた加古川本蔵である。「忠臣蔵」三段目に次のようにある。

お次に控へし本蔵、走り出ておし止め。コレ判官様、御短慮と。抱きとむるその隙に……

・よかハのかくはんをほり川の御所へつかハし給ふ……

怒った頼朝は、堀川御所の義経に討手として横川覚範をさしむける。「御所桜堀川夜討」(元文二年(一七三七)一月二十八日竹本座)など、討手に土佐房をつかわすが常であるが、覚範とするのは、覚範実は能登守教経が活躍する「千本桜」の吉野合戦を暗示するため。ここで吉野をにおわせておいて、「妹背山」「矢口渡」を重ねた世界が展開する。義経は、「妹背山」三段目大判事清澄館の世界へ落ち行く。

・石どう右馬之丞……

義経の首を討つ上使石堂は、塩谷切腹の検使でもあった(「忠臣蔵」四段目)から、挿絵に家老由良之助(二つ巴の紋)が登場する。

・くび見るやくにと松王丸を……

「手習鑑」四段目では、松王丸が菅秀才の首改め役を務めた。  
松王丸先年あをむぎをかりしとがを……

青麦を刈った科云々は、「太平記」巻十六「小山田太郎高家刈二青麦一事」に基づく。小山田が青麦を刈った科を新田義貞は赦す。その恩返しとして義貞のために討死する。これを、義経の身代りとなる「妹背山」の久我之助にあてた。

これより義経よしのを立のき 大もつのうらへと……

「千本桜」五段目の吉野山で横川覚範（能登守教経）と刃をまじえる義経が佐藤忠信（狐忠信）であったことをかすらせる。

・ かるうゆらの助……

由良之助（「忠臣蔵」の世界）は、偽せ首と言わせまいと首改め役の松王丸（「手習鑑」の世界）に対峙する。「にせといハ、ゆるさしと心をくはる」には、「手習鑑」四段目の武部源蔵の心中がうかがえる。源蔵は、松王丸の子を菅秀才の身代りに仕立てたのであった。次のようにある。

武部源蔵白台に。首樋乗てしづく出。目通に指置。ぜひに及ばず。菅秀才の御首打奉る。サ云は太切ない御首。性根をすへてサア松王丸。しつかりと見分せよと。忍びの鐔元くつろげて虚と云ば切付ん。実と云ば助けんと堅睡を。呑んで扣へ居る。





・久我之助切腹の場には、上使の石堂らがひかえる。塩谷切腹の場をふまえている。「大はんじ」は「こがの介」の父。

・行かれたるたびのもの 一夜のやとを……

吉野から大物へ落ちる一行。義経、弁慶に応待する一つ家の娘のことは次の世界への導入。次への興味をつなぎとめる工夫である。

### (三ウ・四オ)

・あるじハ銀平本名ハ新中なこんとももり……

銀平実は中納言知盛から渡海屋銀平（知盛）の登場する「千本桜」の世界となる。

・娘おふね……

先の「このやのむすめよしつね公を見そめる」（三ウ）等の記載から、求女を慕うお三輪（妹背山）、弥助を慕うお里（千本桜）の面影を宿しながら、娘の名を出すことによって、新田義峯（義貞の息、義興の弟）に恋する「矢口渡」のお舟の姿に焦点をあわせる。「よしつね公もやどをかる手が、りと娘にはだをふれ給ふ」は、「矢口渡」四段目の「私の内に。泊りなざつたがよいわいな」以降のお舟の姿と重なる。義経は義峯でもある。宿の主人が銀平

実は知盛だから、「千本桜」に「矢口渡」を二重写しにする。即ち大物浦が矢口渡となる。

・おふねハおやのそふりこ、ろへずと義つねをおとし参らせ……

お舟は、父が義経を討つと知って、義経の寝所に忍び入り身代りとなる。これは「矢口渡」のお舟（義峯を逃がすために死ぬ）をかぶせる。かつ、夫になりかわって遠藤武者盛遠（後に文覚）に首をかき切られる袈裟御前と同趣向であり、後に文覚の名を出す伏線でもある。

・一ねんほつきしてもと、りおし切 名ももんかくと改……

義経ではなく娘お舟の首と知った銀平（知盛）は、出家して文覚となる。

「矢口渡」四段目では「一人りの娘が先キ立テば一念発起もし給ひて」とお舟に言わせている。面白いのは、この表現をふまえながら「芝居巡」では父の行動にすりかえていることである。「矢口渡」の父頼兵衛は、出家どころか舟を出して義峯を追う。「千本桜」二段目の銀平も同じである。「芝居巡」の父銀平（知盛）は、「矢口渡」のお舟が口にしたように、一念発起して文覚と改め高野に籠もる。

文覚が盛遠であることはよく知られた事であり、知盛が文覚と改めたとするには無理がある。このことは作者にもうしろめたさ

があつたみえ

とも盛かもんがくになるとハどうしたことじゃ さりとハともむりじや

との書きいれがそれを物語る。「千本桜」四段目の能登守教経が

「再会の名は横川の覚範」と名乗ることともかかわろうか。

・しもべ六藏かちうしんにて あげちミつひで大せい引ぐし……

「芝居巡」では出家した父に代つて「矢口渡」の登場人物と同名の下人六藏が、明智に注進する。

・義つねを打とらんと矢口のわたしにさしか、り……

そもそも義経が宿を乞うたのは大物浦であつたが、いつの間にか矢口渡にすりかえてしまう。

・時ニふしきや 一天にハかにかきくもりらいてんはた、かミしてうん中ニあく源太のほうこんかミなりとなり あげちをひつつか

ミニツに引きさく

「矢口渡」四段目の次の個所と同じである。

川波逆立かき曇る。空に雷電霹靂。……空中より声高く。

ヤア、竹沢監物秀時慥に聞ケ。汝が術に亡びたる新田左兵衛ノ佐義興が。一念爰に顕はれて恨をなさん。……上より黒

雲覆ひか、り。甲冑を帯したる義興公の御姿。馬上ゆ、敷ク出立ッて。御手をのべて竹沢が頭を抓と見へけるが。二ツに

さつと引裂いて……

これは「太平記」第三十三「新田左兵衛ノ佐義興自害ノ事」に基づく。矢口渡辺にて、江戸（竹沢と共に義興を欺いた）の頭上に黒

雲がかかつて雷鳴がとどろく。義興に射通されたと思つて落馬し

た江戸は、死に至る。続けて次のように描く。

其翌ノ夜ノ夢ニ、畠山大夫入道殿ノ見給ヒケルハ、黒雲ノ上

ニ太鼓ヲ打テ時ヲ作ル声シケル間……新田左兵衛ノ佐義興、長二丈許ナル鬼ニ成リテ……

「平治物語」下の「悪源太雷となる事」では次のようにある。

はれたるそらにはかにくもり、雷をびた、しくなりければ、難波の三郎いひけるは、悪源太をきりたてまつりし時、雷に

なりて、汝をばけころさむといはれけるが、その、ちは雷だになれば、おもひいでられておそろしき。といひければ……

雷はたとなりおちければ、難波三郎……馬ともにけころされ

てぞふしにける……

場所が矢口渡ゆえ、「矢口渡」の世界であるが、主人公は義経だから、悪源太の亡魂が登場する。次に展開するのが「安達原」の世界となるから、その予告でもある。黒雲の上に太鼓を打ち、鬼となつて二つに引きさくのは挿絵そのままである。

・三ウは、義経に想いを述べるお舟と二人の様子をうかがう弁慶





お舟の首を前に出家する父銀平を描く。

・四才は矢口渡の戦さを描く。「そのときよしつねすこしもさハかず」には「千本桜」二段目の知盛が「サアく勝負と詰寄れば。義経少シもさはぎ給はず」に同じ。「へんけい とももりかとおもひしゆすをおしもむ」も同個所の「数珠さらく」と押しもんで」と重なる。矢口渡ではあるが大物浦でもある。この辺りは能の「舟弁慶」にも重なる。「あけちニなつて」は、「朱血」と「明智」を掛ける。「ミづあみだぶつ」は「南無阿弥陀仏」の地口。舟軍ゆえに「南無」ではなく「水」とした。

(四ウ・五オ)

・いろいろたのめども……

文意不明なので脱文があるか。

・文治安かた山よりかへりがけ……

「文治安かた」の名から「安達原」四段目の世界が広がる。「文治」には、「妹背山」二段目の山から帰る狩人芝六を重ねる。僧に一夜の宿を提供し、鉢うえの梅を焚いてもてなすのは「北条時頼記」(享保十一年(一七二六)四月八日豊竹座)にあり、能「鉢木」に基づく。

・文治の身の上をたつねられ……

「安達原」「妹背山」「北条時頼記」そして能「羅生門」の世界を巡って文治は渡辺綱となり、鬼の腕ならぬ鍛をとり戻そうとすることから、鬼の茨木実は景清の世界が展開する。

本名を綱と名乗るのは、能「羅生門」の世界を重ねるためである。綱は鬼神の姿を見るために羅生門に行く。

しるしの札を、取り出だし、壇上<sup>注8</sup>に立て置き、帰らんとするにうしろより兜の、鍛をつかんで、引き留めければ、すはや鬼神と、太刀抜き持つて……

「しるしの札」とは金札であり、このあと鹿殺しの証拠に使う。鍛をつかんで引きとめることは、景清と綱の鍛引きにつなげるためである。綱と鬼神の鍛引きだから、景清を鬼とみまがうのは尤である。景清の鍛引きは有名な話であり、「千本桜」二段目にもあ

る。  
一宿の札に鍛を返した景清は、頼朝の首を狙って鎌倉入りすると語る。出立に際して粟飯を振舞われることは「北条時頼記」にもあり、その姿を「あわのめしびつを引か、へてぞくらひける」との表現には、「千本桜」四段目の弁慶の姿が重なる。

弁慶といふくらひ抜ケの候へば。いか程くらひ込んも知れず……一山ノの出し前にて。茶粥をくはせ養ふが勘定ならん。

・文治ハよしつね公よりあづかりし玉きの宮 ものいひたまはず  
此やまひをなをす二ハ つまろのめじかのいきちを……

「玉きの宮」のことは「安達原」一段目に「当今の御弟君環の宮」とあり、同四段目に次のようにある。

我国へ下向の時より、物いひ給ふ事叶はず……昔漢の世に或人此病を煩ふ、名付けて止声病といふ、其頃蕃婆が秘密の家方、孕める女の腹を裁ち、胎内の子の血汐を用ひて立所に平癒す。我是を行はんと……

宮の止声病は「安達原」によつてゐる。その薬は胎児の血汐である。「芝居巡」での薬は、爪黒牝鹿の生血である。「妹背山」では入鹿退治のためである。四段目から引用しておく。

きやつが心をとらかすには。爪黒の鹿の血汐と。疑着の相ある女の生血。これを混じてこの笛に灌ぎかけて調ぶる時は……自然と鹿の性質顕れ。色音を感じて正体なし。その虚を計つて宝剑を過ちなく奪ひ返さん、鎌足公の御計略……

病のこと、葉の血汐（胎児、牝鹿）のこと、微妙にズラしながら重ねて、世界をふくらませていることがわかる。

・三作ハち、のミのうへをおもひわれとわがでに代官所へうつたへに行……

「妹背山」二段目に基づく。父の身代りにたつ三作は、弟に鹿殺

しの科人は三作と書いたふみを届けさせる。「安達原」二段目にも同趣向(子供の葉代のための鶴殺し)があり、文盲の妻が科人は文治と書いたふみを夫から渡されて訴人する。

・景清は鍛をもつ姿で描くが、鉢の木を焚いて馳走する綱のせりふ「さてく／＼よふくふもの、ふかな」から、飯櫃をかかえる姿まで浮かぶ。女房のうしろには、他に二つの鉢、三尊仏、時計を描く。鹿殺しの罪で捕り手にかこまれる縄目の三作を悲しむ母。その時、証拠の金札を見せて犯人と名乗り出る景清。これは、「とがにんと成かまくらへ行よりともニあはん」という景清の計略であった。

「安達原」二段目では義家が金札を付けた鶴を放つ。文治は「鶴殺しとなって都へ引かれ、八幡太郎に見参せば、それこそ日頃の願成就」と語っている。文治は、安倍頼時の家臣鳥海安秀の一子、文治安方であるから、主君の仇八幡太郎義家にあうためであった。「芝居巡」では、景清と頼朝におきかえた。金札をつけて鶴を放つことは、「工藤左衛門富士日記」(享保十三年(一七二八)三月二十二日竹本座)にもあり、頼朝のこととして描いている。



・かげきよハ平家□あたよりともをうらミンと まなこにうをのうろこを入…:

曲亭馬琴の『玄同放言』註卷之二「第廿六人事」の景清の項に次のようにある。

種つりものかたり説せつに、平家の侍、悪七兵衛ノ尉景清、復讐の志を得遂つケずして生拘なまらる、幕府(割註)頼朝卿。その義を誉るに、晋ノ予讓の故事に因て、誅を加へ玉はず、然けれども景清は、讐しを視るに得堪たずとて、みづから両眼を剔と挑とつ、日向ノ国に赴ゆきて……この稗説は、上総ノ五郎兵衛尉忠光が事を撮合とりあして、作りなしたりとのみ思ふもの多かり、彼忠光が事は、東鑑巻第十二建久三年正月廿一日、前ノ幕府、渡二御ト云于新造ノ御堂ノ地ニ条に見えたり。忠光被レ召シ捕一、面縛之処、懷中ニ帶ニ一尺余リノ打刀一、魚ノ鱗ノ覆ニ左ノ眼上ニなどいふ事、その条に見えたれば、景清が旨になるといふ事、是より出たりといふべし……

関連する中国の話などが続くが省略した。

・いわ井の勾当

未考。

・かまくらごん五郎……

鎌倉権五郎景政は、後三年の役に活躍した。義家の家来であり「安達原」の世界。弁慶は義経の家来。坂田金時は渡辺綱と共に頼光の家来。篠塚伊賀守重弘は新田義貞の家来で大力で有名。

・入鹿がくびをかき切給ふ……

「妹背山」四段目に次のようにある。

玄上太郎、金輪五郎……腰の番をしつかと組む……鎌足後ろにつ、と寄り。神通希代の焼鎌に。水もたまらずかき切つたる。首はそのま、虚空に上り。火焰をくわつと吐きかけく。飛鳥の如くかけ廻る……

金時と伊賀守が左右に組みつくことは玄上と金輪の姿に似るし、義経が鎌で首を切る姿は鎌足に、火を吹く切り首も同じ。甲にくいつこうとする首は酒吞童子を想像させる。

・御れんし御中むつましく……

頼朝の討手により命を終える義経だが、御中むつまじいとするのは、草双紙の定番通りにめでたく結んだ。

・右上の人物の袖に「重」とあるので、畠山重忠であろう。「たくミあらはれうたる、」とあるから、師直の悪をこらしめたものか。・よりとも公のふくを切さき むねんはらす

前述『玄同放言』にもある晋の予讓の故事によるが、よく使わ





れる趣向。「大仏殿万代石楚」<sup>註15</sup>（享保十年（一七二五）十月二日豊竹座）三段目に次のようにある。

寛仁大度の頼朝公……頼朝が命汝に与へ本望とげさせたく惜しからね共。勅に応ずる我命我物にて我物ならず。征夷將軍の官も名も我身に添へたる其上の衣。切なり共突き成共心の儘。主人の敵源の頼朝を討たりと。大音声に名乗……

悪七兵衛景清が主君の仇を報ずる剣。請取やつと念力はる、裏紫の袍。さし通し／＼すん／＼に切裂き……今こそ本望達したり。……晋の予讓が手うへの衣。三千余里をへだて、も。忠臣の義は一同にあつと。感ぜぬ人も無し。

この場に重忠も同座している。挿絵の重忠の視線が景清にそそがれている理由でもある。予讓の趣向は、「ひらかな盛衰記」（元文五年（一七四〇）四月十一日竹本座）三段目、「千本桜」三段目（梶原が預けた頼朝の陣羽織を引きさこうとする内侍）、「安達原」三段目（袖を射削ること）などにもみられる。

・入鹿をたいぢ給ひしかまを……

木村八重子氏「未紹介黒本青本<sup>註15</sup>18」の『大職冠鎌倉開』（黒本、大東急記念文庫）の粗筋によれば、大極殿で入鹿の首を討つこと、火焰を吹いて鎌足に飛びかかること、鎌倉の名は入鹿を退治した鎌を大倉郷に納めたためと由来を述べている。このような例が

あったことがわかる。

#### まとめ

「義経芝居巡」について、浄瑠璃を中心に考えてきた。軍記や能ともかわり、これらの趣向の吹き寄せで仕立てている。いくつもの演目をいれこみ、二重三重にかさねて俳諧のつけあいにも似た手法で物語は展開する。例えば、羅生門の世界で証拠の品として使われる金札が、金札をつけて放生した鶴殺しの証拠に転じ、鹿殺しの証拠に転じる。しかし、鹿殺しの証拠になると、いささか違和感が伴なう。

趣向をないませるので、継目に矛盾はあるが、浄瑠璃や物語の内容を知っている読者なら、継目の空白に、それらの残像を宿らせて行くので、筋が通るような感じにさせられてしまう。又、物語の進展と共に、キーワードをもとに、次に展開するつけあいの語に考えをめぐらせる楽しみもある。

一つの芝居を絵本化したものが多い中で、いくつもの有名な芝居をみとりにしている所に特色があると言える。その例として、黒石陽子氏の「風流いかい田わけ」考<sup>註</sup>や植木智広氏の「黄表紙『気散夢物語』翻刻と註釈」<sup>註</sup>がある。

また、黄表紙に似て、絵のみで文章化されていない情報もあり、絵と文章をあわせて読みとかねばわかりにくいし、見立ても必要となる。その反面、芝居好きにとってはこの上ない暑氣払いと言えよう。「渡海屋銀平 本名は中納言知盛」として芝居を楽しんでいた江戸時代の人びとにとって。

#### 注

- (1) 引用は『浄瑠璃集』（新編日本古典文学全集 小学館）による。振仮名、節譜等は略した。以下も同じ。
- (2) 引用は日本古典文学大系本（岩波書店）による。
- (3) 引用は『文楽浄瑠璃集』（日本古典文学大系 岩波書店）による。
- (4) 引用は『風来山人集』（日本古典文学大系 岩波書店）による。
- (5) 引用は『竹田出雲浄瑠璃集』（新日本古典文学大系 岩波書店）並木宗輔による。
- (6) 引用は日本古典文学大系本（岩波書店）による。
- (7) 引用は日本古典文学大系本（岩波書店）による。
- (8) 引用は『謡曲集』下（日本古典文学大系 岩波書店）による。
- (9) 引用は『浄瑠璃名作集』上（有朋堂文庫）による。

- (10) 引用は『浄瑠璃集』（新編日本古典文学全集 小学館）による。
- (11) 引用は『日本随筆大成』5（第一期 吉川弘文館）による。
- (12) 引用は『豊竹座浄瑠璃集』一（叢書江戸文庫 国書刊行会）による。
- (13) 『日本古書通信』（二〇二二年一月号）による。
- (14) 『叢』33号（平成二十四年二月）。
- (15) 『渋谷近世』17号（國學院大學近世文学会 平成二十三年三月）。